



お

18

れ

も

の

の

の

18

R-18



R-18

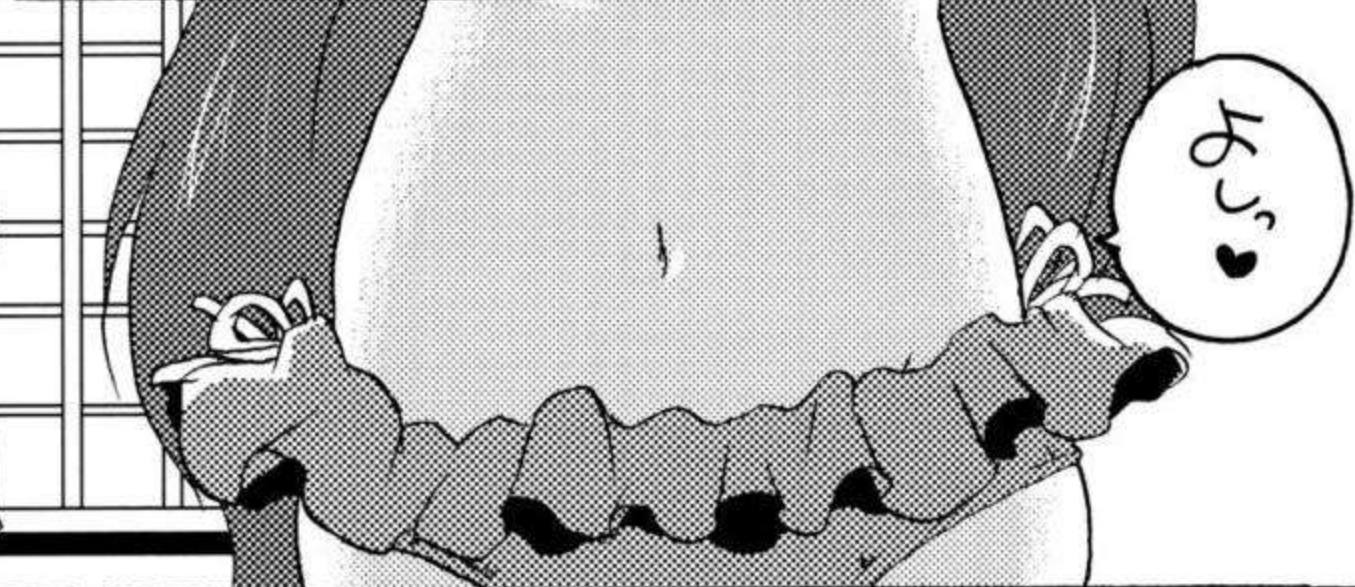
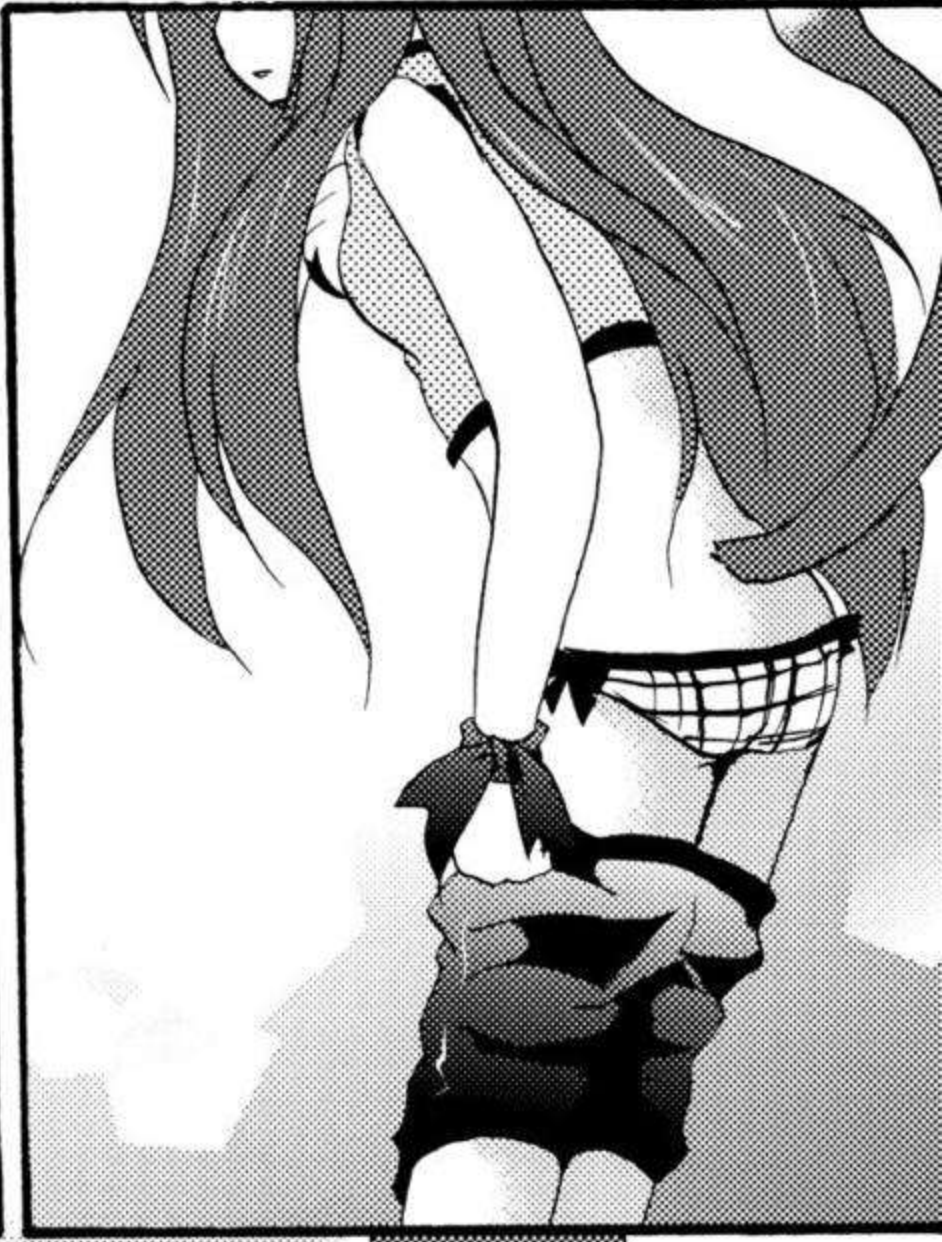
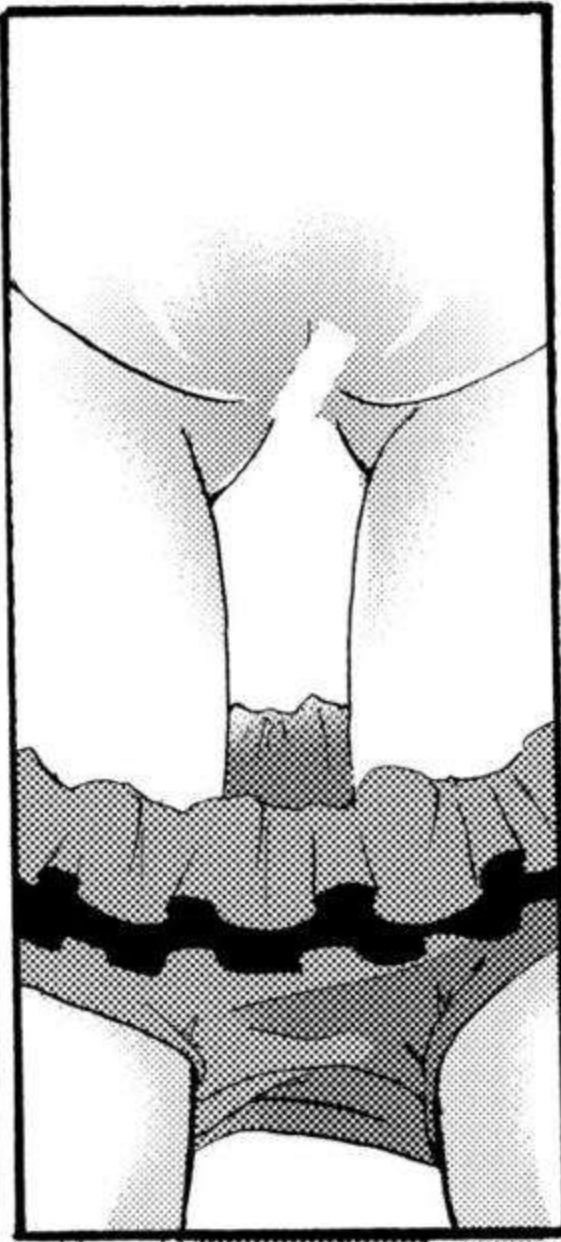
はじめましてこんにちは碧愛こずです。
夏コミで出そうと思った本が不甲斐ないせいで
出せなかったのが9月になりました。
でもまだまだ暑いから水着なんか着ちゃっても
いいよね！…よね…！

「狂乱すいーとさまーたいむ」のネタひきずっている
内容ですがこれ単体でもまったく問題ないです。
凰火と凶華様がいちゃいちゃしてるだけです。

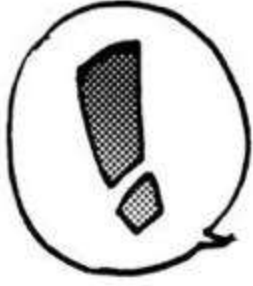
あと！素敵なゲスト様の小説もギョン萌えハアハア
なのですやったー！

まえがき最後にまわしたらまた時間ないです。
ではよろしくお願ひします。





刺激が強すぎるんです
襲われに来たのですか？



やだー
凰火のえっせい

鳥哭島バカンスで
凶華様の水着姿を
思う存分堪能できな
かったかなー

ていう妻の
心遣いなのだ

大きな
お世話です

でも
どうせなら

ポニーテールも
してください



ヒ...
ニ...
ニ...
ニ...
ニ...

3...
キ...



キ...
キ...

キ...



キ...

キ...
キ...
キ...
キ...
キ...



ちよ...っ
何してるんですか

そんなにおつきくも
ないくせに...!!

おきく

そんなこと...
されたら...

おきく...

おきく...
おきく...

おきく

おきく

おきく

おきく



何情報ですか!!
そんなことは...っ

うそつけ
もうこんな
かたくして

ハハハ...



でもこれで

イツつちや
だめだぞ?

ハハハ

ギョッ



風火は
はさむの

好きだったよな?



ハハ...





煽らないで
くださいよ...!

ん

ん...
ん...
ん...

もみ



きん

ん

ズン

凶華のなか
すこく
締め付けて
きますよ?



ん...
ちん...
ん...

ん...
ちん...
ん...

ん...
ちん...
ん...

ん...
ちん...
ん...

ん...
ちん...
ん...



ゴゴゴ

ゴゴゴ...

ゴゴゴゴゴ...

ゴゴ

ゴゴ

ゴゴ

ゴゴ

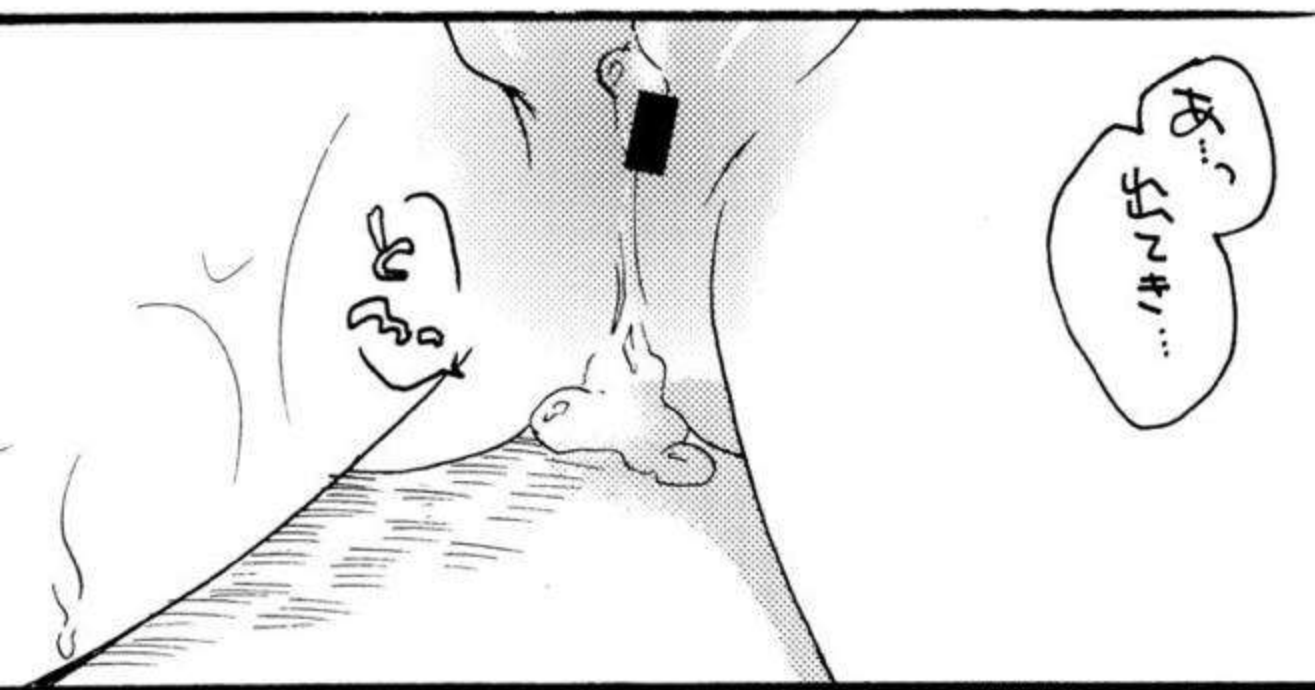
ゴゴ...

ゴゴ...

ゴゴ...

ゴゴ

ゴゴ



おわい

夏の残滓を纏う熱帯夜が続いている。

太陽が猛威を振るう季節の灼熱は、曆の上では秋となった今でもその姿を隠して色濃く沈殿している。

陽射しに直接照らされるのならば遮ればいい。単純なことだが、幾分かの効果は期待出来る。照りつける陽光から逃れた喫茶店、あるいは風の通り抜ける木陰などで一休みなどするのもまた良いものだ。

しかし遮るべき太陽のない夜間の熱は、逃げ場さえも封じ込められてしまったような陰湿さを感じさせる。昼間の熱に苛まれた身体を休めるための睡眠を阻害される、肉体的にも精神的にも全く許し難い暴挙である。

盛夏を過ぎたとはいえ悪足掻きのようにいつまでもこびり付く熱が、余計に腹立たしさを増強させる。

そもそも冬の寒さには衣服を重ねるなどして簡単に克服出来るに對し、夏の暑さは服を脱いだ程度では歯が立たない。脱ぐにも限度があり、例えば往来でその手段に頼ろうものなら、更に一線を越えてしまおうものなら、それはそれである意味寒い状況となってしまうだろう。

頭の煮えた輩と思われたくなくば、適切な場所においてのみその手段は行使されるべきである。

例えば。

残熱夜

瀬浦 忍

「あああああ！暑い！暑い！夏！お前はもう終わったはずだろうに誰の許しを得てこんなにも猛り狂うか！凶華様は許可した覚えがないぞ！反逆か神への反逆か！」

手足だけでは飽き足らず頭まで振り回して、凶華は熱への抵抗を試みる。

「やかましいですねこのネコミミは……それにそんなにわめくと」

駄々をこねる小さな子供のような、というよりもむしろそれそのものである妻の八つ当たりの拳を避けながら、鳳火は手にした団扇をはたはたと振っている。

「……あつい」

「ほら、言わんこつちやない」

暴れた分余計に暑くなったのだろう、ぐったりと動かない凶華に微風を送る鳳火の衿元は大きく開かれ、じつとりと籠る体温を逃がしている。寝巻といえどきつちり着込む性格ではあるのだが、流石に連日の熱帯夜とあつてはそうも言っではいられない。

呻く凶華も寝巻といえば着ぐるみパジャマであったのだが、今現在の気温でそんなものを着ていては逆に体調を壊すということで筆箆に封印しているようだ。娘たちとお揃いで買ってきたという薄手の淡い桃色のネグリジエの着心地は上々らしく、何故だか男物のサイズの一着が部屋に置かれていたので鳳火はそつと長男へと横流ししたのだった。

「なあ鳳火、この妻が、可愛らしくも美しく強く儂い貴様の最愛のハニーである凶華様がクーラーを望んでいるのだぞ？ちよつとくらいつけたっていいだろう？な？ちよつとだけ、ちよつとだけだからダーリン」

「駄目ですハニー」

「何故なのだー凶華様は神様だぞ！全知全能であるぞ！暑いぞ熱いぞあつくてしぬぞ！神は死んだ！」

「はいはいニーチエニーチエ」

熱帯夜、とはいえ文明の利器をもつてすれば克服も容易である。人類は常にその生活を快適とするために知能を技術を磨いてきた。気温や湿度を原因とした寝苦しい夜であるのなら、冷房機器を用いればその問題はあつけなく解決してしまうだろう。勿論この部屋の上部にもその英知の賜物は取り付けられていた。

「節電、ですよ。ただでさえ家族が多くて電力消費量が他のご家庭よりも高いんですから。この夏の請求書、見たでしょう？ひどいものでしたよ。親である僕たちから我慢していかないと、子供たちに示しがつかないでしょう。それに、扇風機ならつけているじゃないですか」

「やあああああこんなそよ風じゃ足りん！もっと冷風を！凍えんばかりの冷風を！というわけでスイッチオン」

「さ・せ・ま・せ・ん」

クーラーのリモコン争奪戦が開幕し、そして両選手試合放棄により僅か数分で終了する。

「……だから暴れるのはよしなさいと言っているでしょう。余計暑くなるんですから」

「ううう。じゃあせめてその窓をだな、網戸じゃなくて全開にするとかな」

「開けておいたら虫が入りますよ。散々蚊に刺されてかゆいかゆい言っていたのはどなたでしたっけ」

「何を隠そう凶華様だ！虫けら風情には神の御血など勿体無いのだがな、そこは慈悲深き凶華様のこと、惜しみなく与えてやったわわはははは思い出すだけでかゆいかゆい！」

「あまり掻くと傷になるので程々になさい」

鳳火は溜息を吐きながら額に滲む汗を拭う。おとなしくしていればやがて睡魔もやってくるのだろうが、兎角我慢のきかない凶華が暴れ出してはそれを諫めるを延々繰り返しているのだからと忙しい。眠れない眠れないと喧しいが、むしろ凶華のこの暴挙こそが安眠を阻害しているともいえる。このまま付き合っていたら朝になつてし

まうかもしれない。慣れたものであるとはいえ、夏の盛りより毎夜のように繰り返されては些かうんざりもしてこよう。

放っておくことも考えたのだが、

「そんなに暑いなら、別の布団で寝ますか」

「それはいやだ」

即答されては、出来る筈もなく。

「なら」

代わりに鳳火はひとつの提案をする。

せめてもと扇風機に嚙り付く背中に触れて囁いた。

「もっと熱くなること、しましうか」

口にした台詞の熱が、夜に溶けて上昇する

「熱い？」

何がです？と耳に囁きを流し込むと、髪の毛と同じ色のネコミミがひくりと震えた。

「あ、あ、つ、おーか、鳳火、の、つ……つあ、あ」

小さな子供の様に首を振る凶華は恥じらいを見せている。その名称を口に出すことに抵抗があるのだろうか。

普段は子供たちの前で明け透けに誘ってくることもあるのに、いざ事に及ぼうとすると、或いはその最中になると凶華は途端に勢いを失う。しおらしくなる。有体と言えば、可愛らしくなる。横暴な暴君そのものを体現する昼間とのギャップもあり、虐げられている夫としてはどこか虐めたくなくなってしまっただが、虐めるよりも可愛がるほうが、夫婦の営みとしては正しい在り方なのではないだろうか、と鳳火は考える。

その二つは、実によく似通っているのだけれど。

「ねえ凶華」

尋ねながら、鳳火は自分と凶華を繋いでいるそれをゆっくりと引き抜いていく。受け入れたばかりの膺壁が馴染む間もなく擦られて、凶華の背が弓なりにしなる。

「あああ、あ、いやだ鳳火、抜かな、つあ、あ」

惜しむように締め付ける動きを、当の本人は知覚しているのだろうか。性器の名称を口に出来ない初心な躊躇いからは対極のような、雄の欲を煽る爛れた衝動を。

「ああ、そうですね」

ぞくりと悪寒に近い熱が鳳火を駆け巡る。組み敷いた愛しい妻の痴態をより堪能出来るように、滾る欲を伶俐に研ぎ澄ませていく。

身体にしがみついていた凶華の掌をそっと掴むと、それは全くの抵抗もなく鳳火の導く方向へと移動する。

「……っ！」

虚ろに喘いでいた凶華が、辿り着いた指先の熱に反応する。手を解こうとしても既に遅く、或いはそのつもりなど毛頭無いのか、凶華は素直に半身ほど引き抜かれた鳳火の陰茎へと指を触れさせた。

「あ、あ、つい、熱い……っ！」

うわ言のように繰り返す凶華の指が砲身へと絡む。

「——っあ、ああーや、あ、熱いい、っ」
室温が、跳ね上がる。

「う、ああ……こんな、に、なって、」

はあ、と陶酔の溜息を漏らす凶華は蕩けた表情のまま、鳳火のそれを指の腹でなぞっていく。

「つ凶華、つ、」

敏感になつていゝ陰茎に挿入以外の刺激が加えられ、鳳火の息が詰まる。腔壁で締め付けられている半分と、形を確かめるかのような指に翻弄されるもう半分、そして口には出せずとも快感を拒むことのない淫蕩な瞳が鳳火の欲を極限まで煽る。

どうしてこんなにも的確に鳳火の理性を崩すことが出来るのだろうか。

「つあ、凶華、つ！」

「ひあ、あ、あ、いきなりしちや、あああ、あ！」

堪らずに再び陰茎を穿つ。突き入れる度に凶華は甘く叫び、乱れる度に鳳火を奥へと受け入れていく。

「熱い、だめ、鳳火の、つだめあつくて変になる、うつ……！」

絡めていた指はいつの間にか陰茎から離れ、今は凶華の腔口を自ら押し広げている。鳳火を深く受け入れる為、更なる快感を得ようとする為の無意識な本能だろう。幼い外見の凶華だからこそ、その仕事はやけに背徳を感じさせた。

「ねえ凶華、わかりますか？貴女のナカも、すごく熱い、つ……！」

「つやあ、あ、あ、恥ずかし、つ」

「僕をぎゅうつと締め付け、て、ああ、蕩けてしまいそうです」

「やだ馬鹿言うな、つ、この助平眼鏡ツあ、あ、ああん！」

涙を浮かべる凶華の額には汗が玉となって滲んでいる。おそらくは鳳火も同様だろう。腰を打ち付ける度に散り弾け、肌を擦り合わせる度に滲み浸食していく。

熱い。

焼けそうに溶けそうに消えてしまひそうに、熱い。

確かに扇風機程度では治まらないほどの熱が寝室に充滿しているが、これは熱帯夜の生み出す昼の残滓などではなく、鳳火と凶華から発せられる欲の具現だ。

高めるも鎮めるも自分次第。
なら。

「凶華」

名前を呼んで、鳳火は額に口付けた。汗で張り付いた髪の毛が邪魔だ。乱暴にならない手つきで髪の毛を散らし、現れた肌へと舌を這わせていく。

「あ、あ、あ、鳳火、やめ、汗、つかいて、」

「ええ。貴女の味がします。凶華」

弱い抵抗も構わずに、丁寧に汗を舐め取っていく。体液の味以外にも何か、ひどく甘く感じるのは錯覚なのだろうか。

「や、あ、ああ、ああ、つあああ、あ」

額を舐めきって閉じた瞼へ、頬から鼻を超えてもう片方へ。鳳火の舌の蠢きに連れられ、繋がった凶華の腔壁が蠕動する。誘い込むような動きに合わせて鳳火はゆるやかに挿入を再開した。

「ん、つあ、あ、あ、つ、いい、いい、気持ちいい、いい鳳火、鳳火あ、つ、」

喘ぐ凶華の首筋へ唇を落とす。しっとりとした肌が鳳火の舌を歓喜で受け止めた。

「ひ、つ、あ、やあ、鳳火ああ……！」

やわく食まれて跳ねた身体を抱き留めて、深く深く奥へと求めて陰茎を沈めていく。

「凶華、つああ、凶華、気持ちいい、ですか、つ……僕も、熱い、ツ」

「あああ、熱い、鳳火の、熱いの、気持ちいい、凶華様のこともっと熱く、つあああああ！」

熱い。

もっと熱くしたい。

いつまでもこの熱に浸っていたいという思いと早く果ててしまいたいと逸る気持ちしが絡み合い、一番高い出口を求めて暴れ出す。

「く、つあ、凶華、つもうイキそ、です、つあ、あ」

身体中の熱が一点へと集結し、限界まで張り詰めたそれが兆候に震える。繋がった箇所から二人分の体液が絡んで溢れ、ぐちゅぐちゅと淫猥な水音が粘度を増していく。

「いああ、あ、あ、凶華様も、も、だめ、だめ、イク、イク、鳳火、ああ、一緒に、いっしょに、」

——あつくならろう？

笑って、凶華は抱き着く腕に力を込めた。反対に身体からは力を抜いて、凰火の導く絶頂へと委ねる。

「ツツ凶華、凶華、あああ、っイ、っあああ……！」

「あああ、あ、あ、あ、凰火、お、っああいくいく凰火あ、あああ、ッあ、あ、あ……ッッ！」

壊れてしまわないように、だが猛る欲の限りに凶華の小さな身体を揺さ振り穿ち、凰火は収縮する奥へと射精する。

進りを注がれながら凶華も同時に昇り詰め、一滴も漏らさぬようにと全てを受け止めた。

「あ、ああ……あ、ついの、が、っあ、あ、凶華様のなか、に」

びくびくと震えながら最奥に飲み込んで、汗と涙と体液でどろどろになりながら、凶華は嬉しそうに笑った。

「そんなこと言っておいて」

おかえしとばかりに。ぺろりと凰火の首筋を舐めた凶華が、悪戯っぽく見上げている。

「また凶華様にやらしいことをするつもりだろう？」

何かを期待しているような目付きで。熱を待っているような緑の瞳で。

「ええまあ……そうですね」

応えるように笑い、凰火は凶華を抱き上げた。

熱を残す夜は、明けるまで続いている。

朝になっても。

季節が変わっても。

「……熱いのも、悪くないものだな」

「そうですね」

摺り寄せてくる身体を余韻ごと抱き締めて、凰火はもう一度口付ける。額にも髪の間にもじっとりと汗が溜まっていた。

「では、だいぶ汗もかいてしまったことすし」

お風呂にでも入りませんか、と凰火は提案した。

「シャワーだけでもいいですし、水風呂でもいいですね。とりあえずさっぱりしないと」

全裸土下座じゃ生温い



押しかけゲストにも関わらず
えらいことご迷惑をお掛け致しました。
今まで以上にチベットに足を向けて眠れません。
めがねこよ永遠に。
こすサンよ永遠に。

全裸回転焼土下座

瀬浦 忍

ゲスト様 瀬浦忍おねえさま

えろきゅんめがねこ
小説ありがとうございます
ましたほんとに！！！！
生き返りまあ！！！！
滾りまあ！！！！
ありがとうございますまあ！！！！
無茶振りレベルな急なお願い
聞いてくぜさって感謝して
おりまあ！！

本当は瀬浦様の小説のらくがきを描こうかなと
思ったのですが時間切れという不甲斐なさです。

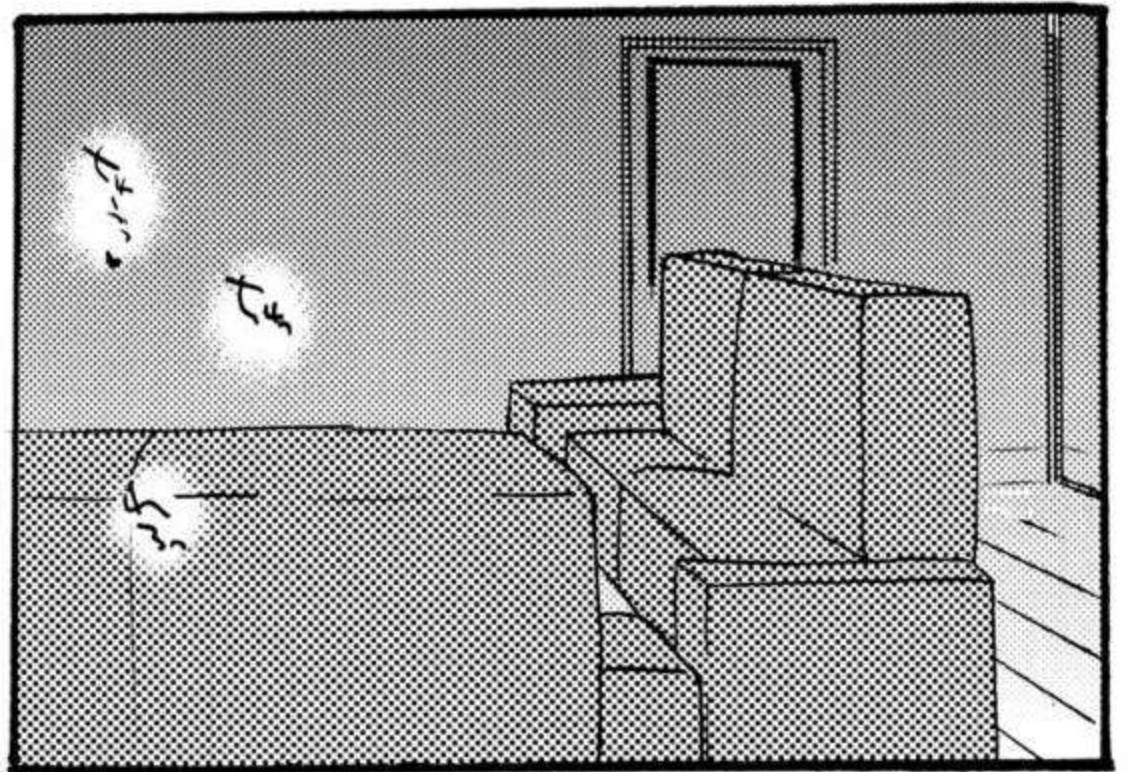
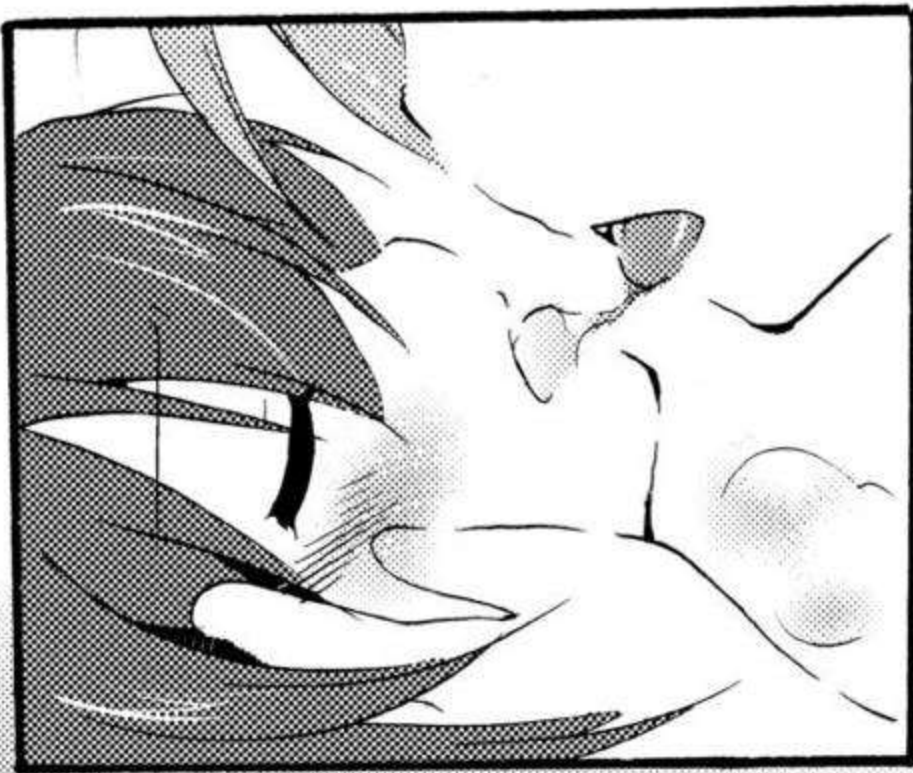
読んでくださってありがとうございました！
ちゃんと描けなかったのがわかりにくいのですが
凰火が座ってるの乗馬マシンです。
そういえば部屋にあったね！忘れてたね！折角だから
上に乗って挿入とかプレイに使えるじゃないか！！
次！また今度是非不規則な揺れに困惑する凶華様を
かきたいところです！！
凶華様といえはおっかいほうのえっちはかくの二回目
ですがやっぱりおっばいが難しい…Bカップくらいかな
と思うのですが中途半端えろいカップを表現するのは
難しい…えろいおっばいかけるように日々精進です。

←からの「狂乱すいーとさまーたいむ」のネタの
続きのようなものです。読んでなくても問題ない
と思います。眼鏡スーツにぎゅんぎゅんしちゃった
凶華様をえがきたいのですが私がかいた眼鏡スーツ
萌えないな…！！！！なんかただのおっさんリーマン
だな！眼鏡をカッコよくかけるようには永遠の課題。
がんばろう…がんばろう…
凶華様の眼鏡にたいするきゅんきゅん度合いとか
色々妄想したのにネームに入りきらなかった無念。

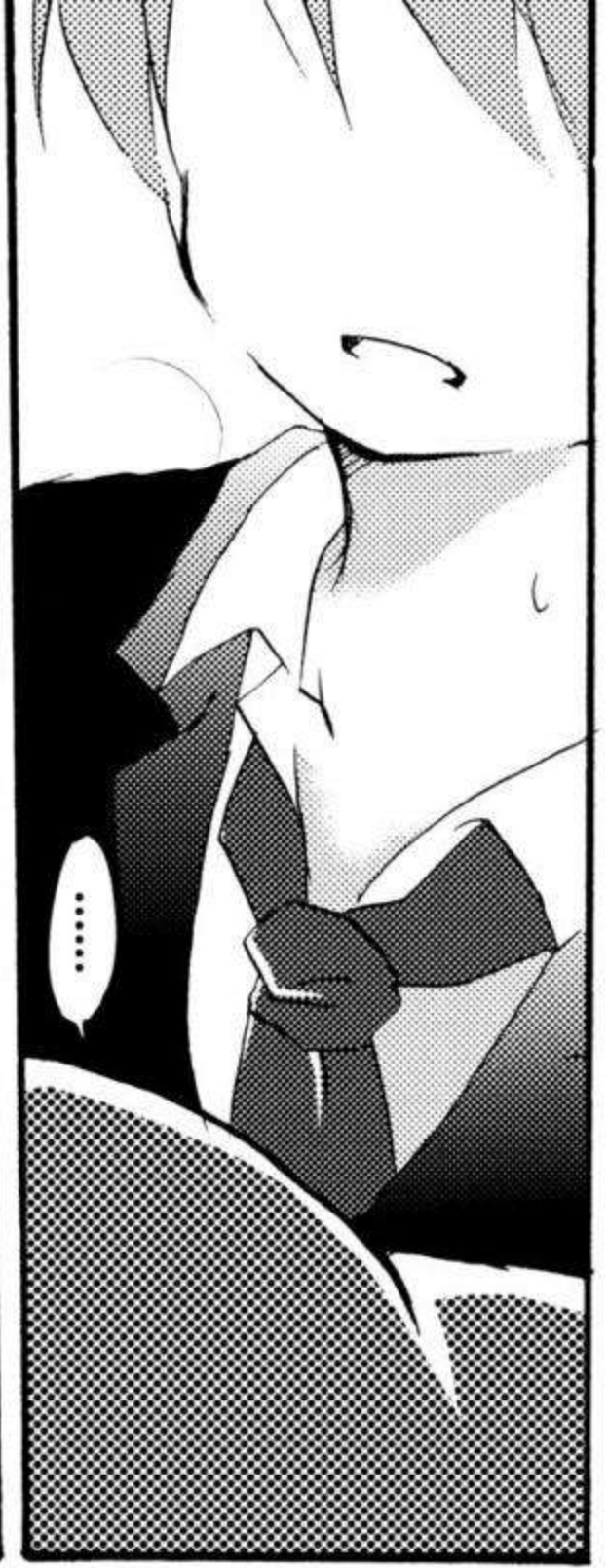
そういえば「いつも凰火がせめせめですね！焦らし
プレイ凶華様かいてくださいよ！」的なことを言われ
まして、初めて凰火がいつもせめせめだということに
気づきました。
凰火が本当に愛してくれてるのがどことなく不安に
思ってるのが出てたな…凰火が興奮して凶華様愛しま
くってるのかいて安心しようとしてたな…気づかなかった。
原作ラストでようやく安心できたけど、凶華様側のアプロ
ーチばかりでそりゃ不安にもなるさ。
という訳で焦らしてみただけどなんか違う(水着に挟んで
みたり)その辺も課題として今後取り入れてみようかと
思います。
では、ありがとうございました！

あべしやるさんくあ
ちよも様

表紙レイアウト
いつもながら
とてもありがとうございます
大変助かるります









おっ!!

おっ!!

おっ!!

なん…か…
いつもよりすこし

ぞくぞく
する……



アハ

アハ
アハ

アハ
アハ

アハアハ...

アハアハ...
アハ

アハ
アハアハ

アハ
アハアハ...

アハアハ

アハ



「なつのわすれもの」

発行:グラスホッパー
発行者:碧愛こず
発行日:2012年9月16日
印刷:オレンジ工房 様

ichigoyoukan@hotmail.com
<http://ichigoyoukan.blog.shinobi.jp/>

※転載、複写、ネットオークション等一般の方の目に触れる
場所への転売等をご遠慮ください
※18歳未満の方の閲覧を禁止します
※原作・関係などとは一切関係のない同人誌です。
※この本にて性描写のある登場人物は20歳以上です。



2012/9/16 ぐらすホウパー





かわ

は

れ

つ

も

の

の

2012/9/16 ガラスホッパー

R-18

